自然の災害

香川県は、気候が温和で、自然から受ける災害によって、人々の生活が決定的に不能になるといった例は極めて少ない。このことから、全国的にみても早くから開発されてきた土地であることが歴史的に明らかである。

高瀬町もこうした傾向にあるが、詳細に調べてみると私たちの過去にも自然から受けた傷跡の記録が残っている。近くは、昭和四七年六月、乾燥気候に次ぐ集中豪雨で、農業構造改善事業にもとづいた二ノ宮地区の茶畑開墾地に相当な地すべりがあった。このときは、早くから警報が発せられていたので、人や物への被害は最少限におさえられたが、全町の消防団に出動要請が発せられるなどした。香川県気象史料によると、過去の歴史年代を通じて、大雨三五回、長雨一五回とあるが、地すべりについては、四国の他の三県に比べて極めて少規模であり、回数も少ない。

雨の少ない地域であるため、わずかの気象異変によっても干ばつへの可能性が大きいことが推察できる。七〇一年（大宝元年）六月に讃岐等諸国旱魃飢饉（ききん）との記録から一八九八年（明治三一）七、八月諸国旱魃、香川甚だし、までに、実に一〇九回の干ばつがあった。ほとんどの灌漑用水がため池に依存し、しかもこのため池が皿池である。池への補給水源は貧弱であるため干天がしばらく続くと干害が発生する。一九三九年（昭和一四）に記録的な干害が発生し、町内の稲作は壊滅状態であったといわれる。その後も、昭和三七、三九、四〇、四一、四二、四八と、干ばつ気味の気候が再三にわたって記録されている。

一九六八年（昭和四三）二月一四日夜から降りだした雪は、翌一五日午後二時過ぎころから勢いを強め、一九〇七年（明治四〇）二月一一日以来、六一年ぶりの大雪となった。山間部で一一〇㎝もの積雪を記録し、主要幹線道路である国道一一号線に、土木用グレダー車が出動し除雪にあたった。自動車や自転車のスリップ事故があいついだため、小学校はほとんどが臨時休校をし、中学生も麻、二ノ宮地区からの徒歩登校を待機させるなど平常通りの

授業は実施できない状況であった。こうした雪害は、香川県には珍しいもので、過去一一回の大雪記録がある。

その他の自然災害を種別ごとに挙げると、

(1) 暴風雨……一七二回

古くからの発生月が、七、八、九月に集中していることから、その殆んどが台風によるものであることがわかる。わずかに冬、春の季節風を原因にしたと思われるものが、二、五月に記録されている。

(2) 地　震……四一回　(3) 雷……二六回

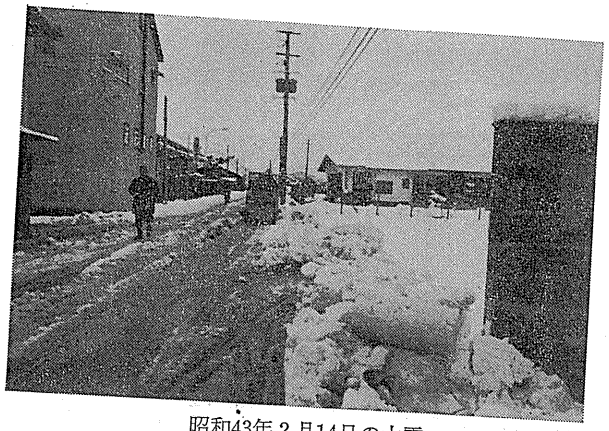
(4) ひょう……一八回　(5) 天候不順…三回などがある。

（香川県災害史による）

これらのほか、季節外れの異常低温による霜害や異常高温などによって、私たちの生活と自然との絶えないたたかいが繰り返されている。

第五節　生　物

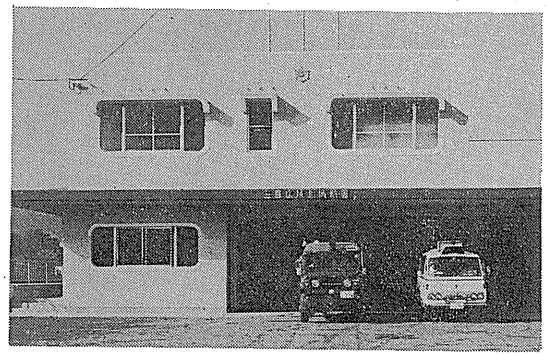
自然事象のあらわす地域性の中で、そこに住み、生えている生物の種類はひとつの大きな視点であろう。すなわち、その土地の気候や風土の総合された結果が、そこに生きる生物の生活適応として現象的にとらえられるからである。高瀬町内の生物相が、隣町の三野、詫間といった海からの影響を直接に受ける町ともやや異なるのは当然であろう。しかし



昭和43年２月14日の大雪

三豊広域消防現有勢力

		自動車ポンプ	水そう付ポンプ自動車	可搬ポンプ	救急自動車	配置人員	隔勤人員
本部						10	
南署	本署	4	1	1	1	30	29
	一分署	1		1	1	15	14
	二分署	1		1	1	15	14
北署	本署	1		1	1	18	16
	三分署	1		1	1	20	19
計		8	1	5	5	108	92



三豊広域消防北消防署

高瀬町消防機械の現況

分団名＼機種	消防四輪	積載車	可搬ポンプ	計
本部分団	1	1	1	2
第1 〃	1		1	2
第2 〃	1		1	2
第3 〃	1		1	2
第4 〃	1	2	2	3
第5 〃	1	1	4	5
計	6	4	10	16

第一八節　歴史が語る水ききん

讃岐の歴史が語るように、讃岐は昔から、水ききんの多い所である。

高松藩記ならびに讃岐の日照り年表を参照してもわかるように、昭和に入って同四年、同八年、同九年、同一四年、同一九年五回の大干ばつの記録が出ているが四八年は三四年ぶりの大干ばつで、高瀬町は高瀬川を水源地として、高瀬川の伏流水を上水道水として使用している。水源地は次のか所である。

矢大　高瀬川の伏流水　日量　五〇〇トン

川下　高瀬川の伏流水　日量　七〇〇トン

深井戸　一〇〇米　一本　白井眼科病院側

浅井戸　六〇米　現水道事務所横　八〇〇トン

日照りによる県下の水不足は古老の話によると一九三九年（昭和一四）の大干ばつ以上だという。県下一円では、断水、干ばつの被害にみまわれたが、高瀬町当局ならびに町議会は何としても断水という最悪の事態をさけたいと決意するとともに、町民一六、八二三名（男八、〇三一、女八、七九二）世帯数四、一八六世帯の幸せを考え、政治折衝の結果豊中町から余水をもらうことに成功し（七月一八日から九月一〇日朝まで日量一〇〇トン）断水の憂目にあうこともなく、大干ばつのピンチをきりぬけた努力は政治とはいかなるものかを町民として、考える好個の材料となるとともに、高瀬町政の努力は高く評価されるべきである。